

不同意表明に伴う手の動きの日中比較

—機能分析のための枠組みの提案—

趙東玲(金沢大学大学院)

1. 背景

言語行動とともに、人々は身体の動きによっても情報伝達をしている。身体の動きは感情の言語的表出を強調する機能などをもつ。その中で、指差しという身体の動きに焦点を当てる会話分析に関する研究は、話者と聞き手の共通知識の示し、意見一致の表示(McNeill, 1992)、同感や自らの気付き、相手の理解度の確認、何について話しているのかという発話のアドレス等の役割(城・細間, 2008)、指令や想起した対象を提示する(高梨・杉浦, 2018)などの機能を持っていると指摘されている。しかしながら、指差し以外の手の動きに関する研究は極めて少なく、細馬(2009)や趙(2018b)があるに過ぎない。

細馬(2009)は、話者交替を含む複数の発話にまたがる「グランド・ジェスチャー」を対象に、発話連鎖の構造とジェスチャー連鎖の時間構造との関係进行分析した。細馬(2009)が注目したグランド・ジェスチャーは一つの発話ターン内で行われているものと違い、同一話者による離れた複数のターン間で連続するジェスチャーのことを指す。そのなかでも、非優先的な応答が隣接ペアの第二ペア部分に来るとき、ジェスチャーの時間構造はどのように変化するかについても事例を挙げながら考察した。事例は非優先的な応答発話と明確な不同意発話のいずれにも伴って表出されるジェスチャーは先行話者のまねをし、拳を振り下ろすものである。そこでは、明確な不同意表現発話に伴う拳の振り下ろしは非優先的な応答発話と比べ、短く切り上げられ、急激に速度を落とし、さらに空中で拳は開き、机の上に開いた手が置かれた。つまり、非優先的な応答と否定は二段構えの不同意表現として捉えられ、非優先的な応答である場合、話者の主張を現したジェスチャーは遅延化されることが判明した。

趙(2018b)は、中国語母語話者を被験者に、相手に対する不同意や話者自身の主張などが言明される際、どのような形の手動きが伴い、それらの手動きはどのような機能を持ち、更にその表出は性差が存在するのかについて分析を試みた。その結果、中国語母語話者は、「指す」・「置く」・「叩く」・「動かす」の4種類の「手の動き」によって言語表現を補助し、不同意や主張などの態度を伝えていることが分かった。しかしながら、趙(2018b)で指摘されたこれらの手動きの機能は、「指す」動作が「指示的な機能」、他の3つの動作をまとめて「行為的な機能」と2区分されているに過ぎない。この機能区分は、手の動きの機能を適切に分析するためにはより細分化される必要があると思われる。

そこで、本稿は日本語母語話者(以下、JNS)と中国語母語話者(以下、CNS)を被験者に、意見交換会話を分析対象とし、手の動きの機能の細分化を試みる。更に、両母語話者の不同意表明に関する手の動きの表出特徴を探ることを目指す。

2. 方法

2.1 分析資料

本稿のデータは、日本と中国語 20 代の女性大学生 2 人 1 組に、ロールプレイの形式による合意形成を目的とした意見交換会話をしてもらったものである。調査は、CNS のデータは 2018 年 3 月に、JNS は 2018 年 11 月に実施し、それぞれ 10 組が得られた。各調査協力者 2 名は角テーブルの角を挟んで着座させ、音声はボイスレコーダーを用い、映像(調査協力者の上半身)はデジタルカメラ 3 台で撮影した。調査協力者 2 名両者を捉える正面のカメラのほか、協力者それぞれの正面に 1 台ずつ三脚で固定されたビデオカメラが配

置されている。会話は、災害等に巻き込まれた子供たちに何かを寄付する場合、写真で提示される 10 種類の品物(飲み物, レトルト食品, 衣類, 書籍, 文房具, 玩具, 布団, 薬品, 衛生用品, テント)のうち, 必要だと思う 3 種を会話前に調査協力者 2 名にそれぞれ事前に選んでおいてもらい, その後 2 人で話し合い, 最終的に必要だと思うものを 3 種に限定してもらおうと設定した。また, 2 人がそれぞれ事前に決めておいた品物が写った写真も, 選んでいない写真も, 机の上に置いたまま会話を開始するよう指示した。

その結果, 日・中母語話者はそれぞれ 79 分 20 秒と 84 分 50 秒のデータが得られた。

2.2 分析方法

2.2.1 不同意表明の検出方法

本稿では, 「不同意表明」を, 相手の考え(ある事実や情報に対する認識, ある物事に対する意見や評価等)とは異なる考えを持つ時に行う不賛成や否定的評価等を含む否定の意味や否定の含意を持つ言語行動のことにする(趙, 2018a: 36)。また, 国立国語研究所(1994)ではあるタスクを遂行するために必要なストラテジーの行動様式を類型化したものを「単位方略」と規定している。そこで, 本稿は趙(2018a)の定義と国立国語研究所(1994)の「単位方略」を参考に, ノンバーバル行動の表出を伴う不同意表明発話を抽出する枠組みを設定した。

2.2.2 手の動きの検定方法

細馬(2008)が提案しているジェスチャーの分析単位に従って分析を行う。一つのジェスチャー単位は, 「準備 Preparation」「ストローク Stroke」「ホールド Hold」「復帰 Retract」といった一連の動作からなる。本稿ではジェスチャーの中心である「ストローク」と「ホールド」に着目し, 手の動きを「指す」・「置く」・「叩く」・「動かす」に分類した。それぞれのアノテーションは趙(2018b)を修正し, 表 1 のようにまとめることができる。

表 1 発話動作の概要

種類	定義
指す	指や手, 或いは手に持っている道具(写真)を使い, それを対象物(写真・机)のほうに向け, またはその対象物に触れてから直ちに離す。
置く	指や手, 或いは手に持っている道具(写真)を使い, それを対象物(写真)の上に下ろし, またその状態を暫くホールドする。
叩く	指や手, 或いは手に持っている道具(写真)を使い, 対象物(写真)の上や周りの机の上で一回打つ, または繰り返し打つ。
動かす	机に置かれている対象物(写真)を手にとって持ち上げ, 場合によってはそれに対する相手の注意を喚起するように目立つ動作をする。または, 机に置いたまま対象物(写真)の位置を変える。

3. 結果と考察

3.1 手の動きの表出機能

ノンバーバル行動には表出と認知の両側面があると伊藤(1991)が指摘している。そのため, それを理解するためには話者の発話にとどまらず, それに対する隣接ペアの第二ペア部分の発話, 即ち聞き手が先行話者によって表出されたノンバーバル行動をどのように理解したのかを考慮するのが不可欠である。本稿は, 細馬(2009), 梶本(2000)で指摘された発話連鎖の構造を判断基準とし, 意見交換発話に伴う手の動きの表出機能をまとめた。その結果は表 2 のようになる。

表 2 手の動きの表出機能

表出機能	特徴	手の動き			
		指す	置く	叩く	動かす
指示	相手の注意を喚起することを目的とし、発話の中で「こ・そ・あ」といった指示語に伴う文脈で瞬間的に当該の対象物に手を向ける。	○			
確認	相手の応答を引き出すことを目的とし、情報提供要求、見解表明要求などの発話に伴い、相手領域に属する対象物に手を向ける。	○			
態度の補強	相手の応答を引き出すことを目的とせず、主張・共感・反対などの見解表明の発話に伴い発話の対象物に作用し、発話の題述部や発話の全体に伴って産出されることもあり、更に複数の発話にまたがることも多い。	○	○	○	○
話題管理 補助	話題の転換、話題の進行、話題の決定などの発話に伴い、対象物の方を指したり、対象物を移動したりする。	○			○
発話対象 内容の確認	対象物にある内容を指摘したり、確認したりする。		○		○
理解補助	情報提供や確認の要求などの発話に伴い、分かりやすさを目的とし、手で発話対象物を叩いたり、または対象物を揃えたりする。			○	○
相手適応	相手の発話に応じて、その発話に言及された対象物を手に取って持ち上げる。				○

3.2 不同意の表明に関する手の動きの表出

身ぶりを行う人物の前にある空間について、ザトラウスキー(2006)はそこを「身ぶりの空間」(gesture space)であると規定した。本稿では話者と聞き手のそれぞれを「話者空間」と「相手空間」とする。相手空間で表出された手の動きは相手(の選択)に対して直接的に不同意表明をする。表 3 に示したように、そのような動きには JNS と比べ、CNS のほうが圧倒的に多い。話者空間で表出された手の動きは相手空間でのそれと比べて相手への働きかけが弱い。CNS は話者自身の選択を提示することによって明示的に相手に不同意を表明することを避け、JNS は手の動きの表出対象は相手の選択ではあるが、相手の領域に踏み込むことを控える特徴が窺えた。河(2012)によれば、社会における自己は他者との関係は共存的・依存적であるがゆえ、こういう相互作用における言語または非言語行動の内的要因の心理的欲求は、「自己志向」と「他者志向」の2つの欲求を併せ持つという。即ち、自己の領域を求め、心理的に自己に対する配慮を優先する自己志向と他者との肯定的な関係を求め、心理的に他者との調和を重視する他者志向を持つという2つの方向がある。相手の意見に同意できない場合に反論を要求するというタスクの下で意見交換会話をを行った JNS は言語的には不同意を表明したとしても、非言語行動を出来るだけ話者自分の領域内に抑えた。つまり、言語的には自己志向を優先しているが、非言語的には他者志向を目指す対人的な配慮行動を採用している。この点は CNS とは異なる特徴である。言語的には CNS は自分の意見を直接的に表明する特徴が多く、先行研究で指摘されているが、非言語行動も言語に対応する特徴が認められた。

また、4 つの手の動きの中で、両母語話者ともに「置く」動作の表出が極めて少ない。瞬間的に産出できる「指す」、素早い拍子で相手に働きかけをする「叩く」、「振るい」或いは「引っ張る」や「捨てる」ような動作性が確認しやすい「動かす」と比べ、「置く」動作は不同意表明態度の補強機能が極めて低いことが分かった。

表3 不同意表明に関する手の動きの表出(回)

種類	JNS		CNS	
	相手空間 (相手の選択)	話者空間 (相手の選択)	相手空間 (相手の選択)	話者空間 (話者の選択)
指す	3	5	21	0
置く	2	0	2	2
叩く	0	4	15	5
動かす	0	6	9	9
合計	5	15	47	16

4. 終わりに

本稿では、意見交換会話における手の動きにはどのような表出機能があるのかを検討した。本稿のデータから観察された、手の動きは「指示」・「確認」・「態度の補強」・「話題管理補助」・「発話対象内容の確認」・「理解補助」・「相手適応」といった表出機能がある。その中で、不同意表明に関する「態度の補強」機能は4種類の手の動きのいずれにも見い出せる。日・中両母語話者のそれぞれに対する表出には異なる特徴が窺えた。JNSは言語的には自己志向を優先しているが、非言語的には対人的な配慮行動を採用している。CNSは言語的に意見を直接的に表明することと同様に、非言語行動をも相手に向けて直接的に表出する。

本稿で観察された特徴は女性同士に限定しているが、その結果が一般性を持っているとは必ずしも言えず、男性同士をも含め考察を行うことが今後の課題の一つとなる。また、意見交換会話に観察された手の動きの表出機能は、不同意表明以外の発話にどのような特徴があるのかを検討する必要もある。

文献

- 伊藤哲司(1991). 対人相互作用場面におけるユニット的ノンバーバル行動の特性 実験社会心理学研究, **31**(2), 85-93.
- 国立国語研究所(1994). 伝えあうことば4—機能一覧表, 大蔵省印刷局.
- ザトラウスキー・ポリー(2006). 20代の女性の談話における指示的な身振りと拍子的な身振りの手の形と機能表現研究, **84**, 67-77.
- 城綾実・細間宏通(2008). 同期する相互指差しは何を示すのか 社会言語科学会第22回大会予稿集, 62-65.
- 梶本総子(2000). 日本語の会話における上下・対等関係の相互的实践, 大阪大学博士論文.
- 高梨克也・杉浦秀行・安井永子(2018). 相互行為における指差しの多様性—会話分析の視点から— 社会言語科学第42回大会予稿集, 246-255.
- 趙東玲(2018a). 日中会話の不同意表明に見られる「配慮」の伝え方の分析 金沢大学大学院人間社会環境研究科 人間社会環境研究, **35**, 33-48.
- 趙東玲(2018b). 「身振り」に男女差はあるのか?—中国語母語話者の不同意表明を例にして— 社会言語科学会第42回研究大会予稿集, 121-124.
- 河正一(2012). 相互作用における言語行動—自他志向と言語行動の動機付けにおける社会的要因— 日本アジア研究, **9**, 45-61.
- 細馬宏通(2008). 非言語コミュニケーション研究のための分析単位—ジェスチャー単位— 人工知能学会誌, **23**(3), 390-396.
- 細馬宏通(2009). 話者交替を超えるジェスチャーの時間構造—隣接ペアの場合— 認知科学, **16**(1), 91-102.
- McNeill, D. (1992). *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago: Chicago University Press.